

第 59 回全国大学保健管理協会 北海道地方部会研究集会



日 程 令和4年8月26日（金）
会 場 ホテル札幌ガーデンパレス
主 催 全国大学保健管理協会北海道地方部会
当番大学 北海道教育大学

目 次

1. 研究集会日程	1
2. 講演Ⅰ 「発達障害の特性を持つ学生の理解と支援について」	4
3. 講演Ⅱ 「口・歯のけがについて」	6
4. 講演Ⅲ 「大学生の対人葛藤解決のヒント」	8
5. 研究発表	10
演題1 「大学における新型コロナウイルス感染症発生状況と感染拡大リスクの検討」	
演題2 「北海道大学生への COVID-19 に関わる感染症のアンケート調査報告」	
6. 参加者名簿	14

第59回全国大学保健管理協会北海道地方部会研究集会日程

(会場:ホテル札幌ガーデンパレス)

令和4年8月26日(金)	
8:30	受 付
	〔 2階 丹頂 〕
9:00	開 会 式
	挨拶: ・北海道教育大学(当番大学) 学長 蛇穴 治夫 ・全国大学保健管理協会 北海道地方部会代表世話人 北海道大学保健センター長 橋野 聡
9:30	〔 2階 丹頂 〕
	講 演 I (75分)
	演題:「発達障害の特性を持つ学生の理解と支援について」 講師:北海道教育大学 教育学部札幌校 准教授 齊藤 真善 司会:北海道教育大学保健管理センター カウンセラー 三上 謙一
10:45	〔 2階 丹頂 〕
	<休 憩>(10分)
10:55	講 演 II (75分)
	演題:「口・歯のけがについて」 講師:北海道医療大学 歯学部 教授 齊藤 正人 司会:北海道教育大学保健管理センター長 羽賀 将衛
12:10	〔 2階 丹頂 〕
	<休 憩 (昼食)>(90分)
	地方部会役員会
13:40	〔 5階 あやめ 〕
	講 演 III (75分)
	演題:「大学生の対人葛藤解決のヒント」 講師:北海道教育大学 教育学部札幌校 准教授 益子 洋人 司会:北海道大学保健センター カウンセラー 武田 弘子
14:55	〔 2階 丹頂 〕
	<休 憩>(10分)
15:05	研究発表(75分)
	司会:北海道教育大学保健管理センター長 羽賀 将衛
16:20	〔 2階 丹頂 〕
	閉 会 式
	挨拶:全国大学保健管理協会 北海道地方部会代表世話人 北海道大学保健センター長 橋野 聡 当番大学:北海道教育大学保健管理センター長 羽賀 将衛 次期当番大学:北海道医療大学保健センター所長 大村 一将
16:30	〔 2階 丹頂 〕

研 究 集 会 日 程

(1) 受 付 8 : 3 0 ~ 9 : 0 0 【会場2階・丹頂前ロビー】

(2) 開会式 9 : 0 0 ~ 9 : 3 0 【会場2階・丹頂】

挨 拶 当番大学挨拶 北海道教育大学長 蛇 穴 治 夫

全国大学保健管理協会北海道地方部会代表世話人
北海道大学 保健センター長 橋 野 聡

(3) 講演Ⅰ 9 : 3 0 ~ 1 0 : 4 5 【会場2階・丹頂】

演 題 「発達障害の特性を持つ学生の理解と支援について」

講 師 北海道教育大学 札幌校 准教授 齊 藤 真 善

司 会 北海道教育大学
保健管理センター カウンセラー 三 上 謙 一

<休 憩> 1 0 : 4 5 ~ 1 0 : 5 5

(4) 講演Ⅱ 1 0 : 5 5 ~ 1 2 : 1 0 【会場2階・丹頂】

演 題 「口・歯のけがについて」

講 師 北海道医療大学 歯学部 教授 齊 藤 正 人

司 会 北海道教育大学 保健管理センター長 羽 賀 将 衛

<休 憩> 1 2 : 1 0 ~ 1 3 : 4 0

※地方部会役員会【会場5階・あやめ】

(5) 講演Ⅲ 1 3 : 4 0 ~ 1 4 : 5 5 【会場2階・丹頂】

演 題 「大学生の対人葛藤解決のヒント」

講 師 北海道教育大学 札幌校 准教授 益 子 洋 人

司 会 北海道大学
保健センター カウンセラー 武 田 弘 子

<休 憩> 1 4 : 5 5 ~ 1 5 : 0 5

(6) 研究発表 15:05～16:20【会場2階・丹頂】

司会 北海道教育大学 保健管理センター長 羽賀将衛

(7) 閉会式 16:20～16:30【会場2階・丹頂】

主催者挨拶 全国大学保健管理協会北海道地方部会代表世話人
北海道大学 保健センター長 橋野 聡

当番大学挨拶 北海道教育大学 保健管理センター長 羽賀将衛

次期当番大学挨拶
北海道医療大学 保健管理センター所長 大村 一将

演 題 「発達障害の特性を持つ学生の理解と支援について」

講 師 北海道教育大学 札幌校 准教授

齊 藤 真 善

司 会 北海道教育大学

保健管理センター カウンセラー

三 上 謙 一

当日は、自閉症スペクトラム障害についてお話いたします。前半は成人当事者が語る内的世界を紹介しながら、自閉症の方が物事や現象をどのようにとらえているのか、皆さんと共有したいと思います。後半は、大学における相談事例をあげ、青年期における自己認知支援、自立に向けた生活支援のありかたについて私の考えを述べたいと思います。

演 題 「口・歯のけがについて」

講 師 北海道医療大学 歯学部 教授

齊 藤 正 人

司 会 北海道教育大学 保健管理センター長

羽 賀 将 衛

どんなに気を付けてむし歯を防いでも、ちょっとした不注意やアクシデントにより、口のけが、歯のけが（外傷）に遭い、大切にしていた歯が折れたり（破折）、抜けたり（脱臼）してしまふことがあります。小児の外傷は、歩き始めて間もない1～2歳の幼児と、小学校に入学したばかりの学童に多くみられます。

幼児はよちよち歩きで転びやすく、転んでも手で支えられず顔面を強打しやすい時期です。乳歯の前歯が受傷して変色や脱臼が多くみられますが、受傷した乳歯の後から生えてくる永久歯表面の性状や、歯並びにも影響を及ぼします。

学童は自転車の乗り始めなど、遊びやスポーツを通して活動的になる反面、アクシデントの機会も増えて、生えたばかりの永久歯の前歯を受傷してしまうことが多く認められます。破折しても、脱臼しても概ね治療は可能ですが、完全に元の状態に戻ることはありません。また、治療期間も数年にわたるケースがしばしばあります。

口、歯の外傷の予防は極めて困難ですが、外傷に対し適切に対処することにより、問題を最小限にとどめることは可能です。本公演では、口、歯の外傷に対して歯科医院に来院するまでの、学校での対応について概説するとともに、歯科での治療法について簡単に紹介します。

演 題 「大学生の対人葛藤解決のヒント」

講 師 北海道教育大学 札幌校 准教授

益 子 洋 人

司 会 北海道大学

保健センター カウンセラー

武 田 弘 子

対人葛藤（人間関係のトラブル、もめごと）は、その渦中にある当事者のストレスを高じ、適応感を損なう、大きな要因の一つです。しかし、紛争解決学的、臨床心理学的な知見から見れば、人間は対人葛藤を避け続けることはできません。そのため、支援者が葛藤当事者の適応をサポートしようと思うならば、当事者が「対話によって」「穏やかに」「お互いに納得できる形で」葛藤を解決するためのサポートができると、なおよいでしょう。

本講演では、支援者として葛藤の当事者のトラブル解決をサポートする手法の一つである「メディエーション」を取り上げ、その理論とコツを解説します。

司会 北海道教育大学 保健管理センター長

羽賀 将 衛

演題1 大学における新型コロナウイルス感染症発生状況と感染拡大リスクの検討

小樽商科大学保健管理センター

○高橋恭子 佐藤希代巳 北川こずえ 杉山 成

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の流行下における大学の感染対策を検討することを目的に、本学に報告された感染事例及び濃厚接触事例から、本感染症の特徴と感染拡大リスクについての分析を行った。

2. 対象と方法

2020年1月から2022年7月3日までに報告された感染者のうち公表に同意があった事例と感染者に関連した濃厚接触事例を対象とした。

濃厚接触事例については、2022年1月以降に報告があった本学関係者の感染者と接触があり、濃厚接触者として外出自粛を要請した事例について分析を実施した。

3. 結果

分析対象となった感染者は187人であった。感染報告数は地域の流行状況と連動し、2022年1月以降の第6波の感染者数は164人と多かった。感染者が報告した感染経路としては、第3波から第6波のいずれの時期も感染経路不明を除くと家族からの感染が最も多かった。第6波では家族以外に食事や課外活動による感染も多く、多様な感染経路が報告された。発症から大学に報告されるまでの日数の平均±標準偏差は 3.28 ± 2.57 日、中央値は3日であった。

対象となった濃厚接触事例は44グループあり、接触状況は食事が22グループ、課外活動が11グループであった。二次感染は22グループに認められ、二次感染の発生頻度が高い活動としては、運動、歌、会話であった。発生頻度は、接触時間が長くなるほど高くなる傾向が見られ、今回の対象では1時間未満の接触では二次感染の発生は0%、1~2時間で43%、3~6時間で67%、宿泊を伴う接触で60%であった。発生頻度が50%を超えた接触場所は、体育館、屋外、カラオケ店、自宅であった。

4. 考察

感染者が発症してから報告までに3日程度が経過しており、感染可能期間からは5日程度が経過して報告されていることが明らかになった。潜伏期間が短いウイルス株の場合は初発感染者の探知と同時に二次感染者が報告されることもあり、迅速な感染対策の実施の難しさが示された。

濃厚接触者については、飛沫が多く発生する活動に加えて時間の長さや空間の要因が二次感染の発生頻度を高めることが改めて示された。今回の分析では、広い空間においても、飛沫が多く発生する活動が行われている場合は二次感染が高率に発生していたことから、複合的な要因からリスクを検討していくことの重要性が示された。

5. 結語

学内での感染リスクを低減するために、二次感染が起りやすい状況を周知し、適切な予防対策を取ることができるような啓発が必要である。

演題2 北海道大学生への COVID-19 に関わる感染症のアンケート調査報告

北海道大学保健センター

○川原由佳子・五十嵐典子・折戸智恵子・吉村彩・武田弘子・大野正芳・橋野聡

1. はじめに

北海道は、2020 年全国に先駆けて新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が発令されて、現在も変異株によって流行が続いている状況である。本学は、留学生も含め学生数は 18,000 人、教職員を含め 25,000 人の大規模大学であり、札幌市人口のおよそ 1%にあたる。2021 年に大学拠点職域接種を実施し 1 - 3 回接種に至った。現在、北海道大学保健センターでは、診療や検査は行なわず問い合わせの対応のみである。これらを踏まえ、感染状況やワクチン接種、検査や学生の思いについて考察し、今後の感染症対策を目的としてアンケート調査を実施した。

2. 方法

本学生約 18,000 人を対象とし、Google フォームを利用した Web 調査を 2022 年 4 月～5 月末迄実施した。アンケートはオリジナルで、検査や感染状況、新型コロナワクチン社名、回数、接種場所、接種に対する辛さの程度を 0-10 段階のスケールを用い、5 段階を「普通の注射と変わらない」とした。解熱剤利用の有無などを調べた。この研究は、北海道大学病院生命・医学系研究倫理審査委員会の承認を受けている。

3. 結果

調査協力者 1,979 名のうち、同意の得られた 1,966 名を対象とした。PCR・抗原・抗体検査を受けた学生は全体の 46%で、48%は費用が発生していた。検査の負担感については、37%が負担であると回答し、負担の内訳で最も多いのは「費用」であった。新型コロナウイルス感染について、全体の 82%が「感染していない」、7%が「感染した」、11%は「わからない」であった。本学の「大学拠点職域接種」と「モデルナ社」が最も多く、接種 0 回が 5%、1 回 1%、2 回 63%、3 回が 31%であった。2 回接種後の辛さについては、6-10 段階評価が 74.2%で、42%が解熱鎮痛剤を使用していなかった。尚、昨年のインフルエンザワクチン接種率は、新入生 53.2%、在校生 18.8%であった。

4. 考察

3 回目接種に繋がらない要因は、接種後副反応の強さなどいくつか考えられるが、若い年代の多くは重症化しないこともあり、感染拡大防止よりも自分の生活を優先させる傾向がある。感染拡大防止には、コストや時間等学生に負担の少ない対応が求められ、学生への細やかな対応が大学保健センターでは可能である。今後、更に因果関係等の分析を進めたい。